国際研究論叢　32（1）：23～42，2018

矢内原忠雄の政治思想（5）
―矢内原の帝国主義批判―

古　賀　敬　太*

The Political Thought of Tadao Yanaihara（5）
― Yanaihara's criticism of Japanese imperialism ―

Keita Koga*

Abstract

As already mentioned in my article *The Political Thought of Tadao Yanaihara (1)*, Yanaihara published an article, *The Ideal of the Nation*, after the Sino-Japanese war broke out. Since he implicitly criticized Japanese invasion to China, he was forced to resign his professorship at Tokyo Imperial University.

This article firstly considers the arguments of Sakuzo Yoshino and Tanzan Ishibashi who vehemently criticized Japanese imperialistic policy toward Korea and China. Their criticism seems to have influenced Yanaihara's attitude about this issue.

Then Yanaihara's stance on the Japanese imperialism and the colonial policy is analyzed in time sequence, based on his books about colonial policy and several trips to Korea and China. Particularly light is shed on the combination of his Christian belief and his academic career, which formed his criticism toward Japanese external affairs. He also hoped for the revival and purification of Christian churches and warned against corruption and compromise with political powers.

キーワード

帝国主義、植民地支配、朝鮮と中国、キリスト信仰、吉野作造、石橋湛山、内村鑑三

＊こが　けいた：大阪国際大学現代社会学部教授〈2018.7.9受理〉

はじめに

矢内原は、朝鮮と中国に対して、どのような関係を持ち、またどのような人脈を築いていたのであろうか。また彼は、朝鮮と中国に対する日本の帝国主義と植民地政策にどのような批判を行ったのだろうか。この問題を、植民地政策を専門とする学者矢内原と、内村鑑三から継承した彼のキリスト信仰という二つの観点から検討することにする。この二つのもの、つまり社会科学的認識とキリスト信仰は矢内原にあっては、表裏一体の関係にあり、社会科学的認識も彼の信仰によって支えられていた。彼が朝鮮や中国のことについて思いをはせる時に、たえず朝鮮や中国の民族の救いが彼の脳裏から離れなかった。

彼は、朝鮮半島の独立こそ主張しなかったものの、日本の同化主義に基づく植民地支配を批判したし、また中国に関しては、日本の満州侵略、日中戦争を批判し続けた。そして彼は、キリスト者として、雑誌『嘉信』を通して、またキリスト教講演会などを通して、朝鮮人や中国人との親しい関係を築いた。『嘉信』の読者は、朝鮮にも、中国にも少なからず存在したからである。彼にとって、日本の運命のみならず、朝鮮や中国の運命は、他人事ではなかった。

本稿では、主に矢内原の朝鮮や中国、特に満州に対する関係に焦点を当てて彼の思想と行動を考察するが、その前に大正デモクラシー時代における吉野作造と石橋湛山の植民地支配についての見解を考察することにする。というのも、矢内原の対朝鮮や中国に対する態度は、内村鑑三の対朝鮮・中国に対する見解を継承したものであると同時に、吉野作造や石橋湛山の対外政策と酷似しており、また彼等から影響を受けているように思えるからである。最近出版された『吉野作造政治史講義』（岩波書店、2016年）においては、1913年に吉野作造の講義を聞いた矢内原忠雄のノートが収載されている。[1)]

Ⅰ　吉野作造と石橋湛山の朝鮮・中国観

1．吉野作造（1878－1933）

吉野作造と中国との関係は深い。彼は大学卒業後、中国において三年間袁世凱の家庭教師をつとめて以来、一貫して中国に対する関心を持ち続けてきた。吉野は、「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表した1916年の３月から４月にかけて朝鮮・満州を旅行し、『中央公論』６月号に「満韓を視察して」を掲載した。彼は、朝鮮における日本の同化政策を厳しく批判する。

「予は先づ第一に内地人の心なき態度を見て、実質に於て幾多の欠陥を見るのは是亦甚だ遺憾に思う所である。政府は法律を以て、総ての学校に日本主義の教育を施さしめて居る。日本語は鮮人の最も重んじて学ばねばならぬ課目である。彼等は日本の皇室を自分の君として讃え、君が代の歌を奏し、日の丸の国旗を誇り、日本の歴史、日本の地理を自分たちの歴史、自分たちの地理として教えられて居る。併し乍ら他の一面に於いて、彼らは社会的にも又法律的にも日本人と均等の機会を与えられて居な

い。」[2)]

そして吉野は民族自決の精神に立って、「異民族統治の理想は、其民族としての独立を尊重し、且つ其独立の完成によりて結局は政治の自治を与えうるを方針とする」と述べている。彼の真意は朝鮮放棄論であった。

彼は、1919年６月に中国で起こった五・四運動を評価し、その運動は「支那国民の自発的な運動」であり、その目標が「外国の侵略主義の排斥」にあることを主張した。そして彼は官僚や軍隊に対抗する「日支学生提携運動」を組織し、「此処から本当の国民親善が起こり、此処から東洋平和の本当の花が咲くのではないか」と期待したのである。

彼は満州事変に関しては、彼の死の前年の1932年１月に『中央公論』に「民族と階級と戦争」と題して、満州事変が「自衛権の発動」の限界を超えていて、帝国主義の戦争であると断じている。×の部分は、検閲によって削られた部分である。

「満州における××××［軍事行動］の本質は、××××［帝国主義的］だと言わねばならぬ。これは論理上当然の結論なのだが、多くの人は多分かく断定するを欲せられるであろう。しかしそれは帝国主義的進出を罪悪視する先入の見に捉われる結果ではあるまいか。帝国主義の悪名を恐れて××××［自衛権］の背後にかくれる。が、やることが事実××××［帝国主義的］であればそは畢竟慈善の××××××××××××が如きものではないか。」[3)]

吉野は日本が日露戦争で獲得した満州の権益を守ることは当然と考えているものの、日本民族の生存のために満州を併合する行動は帝国主義以外のなにものでもないと批判した。

吉野が予想外であったのは、満州事変を国民が歓呼して歓迎している姿であった。それは、正義に反する行動であった。彼は言う。

「戦争で勝ったからとて、今に莫大な利権が×××［とれる］からとて、全国民がただ一本調子に歓喜するのみなるは決して正義の国日本の誇るべき姿ではない。満州事変に関する問題の全面について国内においてもっと自由無遠慮な批判があっても然るべきではあるまいか。今次の事変は、日清戦争や日露戦争などとは全然その性質を異にするものである。」[4)]

吉野は、新聞各紙が一律に満州出兵を謳歌したこと、また無産階級がこの戦争に対して反対を表明しなかったことに驚きを禁じ得なかった。まさに日本全体が雪崩を打ったように満州支配を支持しているように思われたのである。とりわけ、無産階級が階級よりも民族を、世界における労働者の連帯よりも民族的必要に傾斜していく姿を嘆かずにはおれなかった。とりわけ無産政党右派で1926年に結成された社会民衆党は、国民社会主義を掲げて、この侵略戦争を支持したのである。

吉野は、第一次大戦後の1919年１月に『六合雑誌』に「国際連盟は可能なり」という論文を寄稿し、国際連盟を基礎とする世界平和を昌道した。吉野は国際連盟が機能しうるためには、国際的制裁権を国際連盟が持つ必要があると考えた。「国際的正義に対する国民共通の意志があれば、之を打破せんとするものに対する共通的制裁」が必要なのである。しかし、国際連盟は、結果的に軍事的制裁権を発動できず、日本の満洲支配に対して関東

軍の満州からの撤兵を決議したものの、制裁を行うことができなかった。この後、日本に続いて、イタリア、ドイツ、ソ連が国際連盟から脱退したり除名されるに至り、世界は第二次世界大戦に突入することになる。

満州事変は、日本国内におけるファシズム化と、対外的な孤立を生み出したことによって、日本の政治の転換点となった。吉野作造は、満州事変の二年後に死去し、それ以降の日本の将来を見ることはなかった。東京帝国時代の吉野作造の思想に共鳴した矢内原忠雄は、吉野の大正デモクラシーの遺産を継承しつつも、彼独自の宗教的立場から、時代の嵐と戦うことになる。その前に、もう一人の人物、石橋湛山の朝鮮・中国に対する態度を紹介しておくことにする。

２．石橋湛山（1884－1973）

後に見るように矢内原は帝国大学の植民地政策として、基本的に朝鮮、満州の植民地支配を認めたうえで、将来的な独立を見込んだ「自治主義」を唱えていたが、すでに石橋湛山は、1921年７月23日号の社説「一切を捨つるの覚悟」において軍備縮小問題や太平洋問題を討議するワシントン会議を前にして、植民地放棄論を提唱していた。石橋は、1911年東洋経済新報社に入社し、経済的・政治的自由主義を掲げる『東洋経済新報』で論陣を張り、大正デモクラシーの一翼をになっていたジャーナリストである。彼は言う。

「例えば満州を棄てる、山東を棄てる、その他志那が我が国から受けつつありと考える一切の圧迫を棄てる、その結果はどうなるか、また例えば朝鮮に、台湾に自由を許す、その結果はどうなるか。英国にせよ、米国にせよ、非常の苦境に陥るであろう。何となれば、彼らは日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界におけるその道徳的地位を保つを得ぬに至るからである。その時には、支那を始め、世界の小弱小国は一斉に我が国に向かって信頼の頭を下ぐるであろう。――我が国にして一たびこの覚悟を以って会議に臨まば、思うに英米は、まあ少し待ってくれと、我が国に懇願するであろう。ここに即ち『身を捨ててこそ』の面白味がある。遅しといえども、今にしてこの覚悟をすれば、我が国は救わるる。しかも、こがその唯一の道である。しかしながらこの唯一の道は、同時に、我が国際的地位をば、従来の守勢から一転して攻勢にいでしむるの道である。

以上の吾輩の説に対して、あるいは空想呼ばわりをする人があるかも知れぬ。小欲に囚わるること深き者には、必ずさようの疑念が起こるに相違ない。朝鮮・台湾・満州を棄てる、支那から手を引く、樺太も、シベリアもいらない、そんな事で、どうして日本は生きて行けるかと。キリスト曰く、『何を食い、何を飲み、何を着んとて思い煩うなかれ、汝らまず神の国とその義とを求めよ、しからば、これらの者は皆、汝らに加えられるべし。』」[5)]

このように石橋は、大日本主義に対して「小日本主義」を掲げ、植民地の放棄を訴えたが、そこには彼なりの経済的な合理性が考えられていた。彼は、1921年７月30日の『東洋経済新報』社説に「大日本主義の幻想」において、当時の日本の諸外国や植民地との貿易

関係のデータをあげながら、「日本本土以外に、領土もしくは勢力範囲を拡張せんとする政策が経済上、軍事上価値無きこと」を訴え、植民地支配のために軍備を拡張することがかえって戦争を誘発すると考えたのである。また石橋は、独立運動、民族主義の高まりの中で、植民地を長く維持できないという認識を持っていた。

「独り我が国が、朝鮮及び台湾を、今日のままに永遠に保持し、また支那や露国に対して、その自主権を妨げるが如きことをなし得るよう。朝鮮の独立運動、台湾の議会開設運動、支那およびシベリヤの排日は、既にその前途の何なるかを語っておる。吾輩は断言する。これらの運動は、決して警察や、軍隊の干渉圧迫で抑えつけられるものではない。そは資本家に対する労働者の団結運動を、干渉圧迫で抑えつけ得ないと同様である。」[6)]

そして石橋は、日本が植民地を放棄することによって、却って朝鮮や中国は日本に対する関係を密にするであろうと予言する。

「どうせ棄てねばならぬ運命にあるものならば、早くこれを棄てるが賢明である。吾輩は思う。台湾にせよ、朝鮮にせよ、支那にせよ、早く日本が自由解放の政策に出づるならば、それらの国民は決して日本から離るるものではない。彼らは必ず仰いで、日本を盟主とし、政治的に、経済的に、永く同一国民に親しき親密を続くるであろう。支那人・台湾人・朝鮮人の感情は、まさに然りである。――『汝らのうち大ならんと欲う者は、汝らに使わるる者となるべし、また汝らのうち頭たらんと欲う者は、汝らの僕となるべし』とは、まさに今日、日本が、隣の異民族異国民に対して取るべき態度でなければならぬ。」[7)]

今紹介した二つの論説の中で、石橋が引用しているのが、聖書のイエスの言葉である。石橋の評論に潜む宗教的信念には、彼が学んだ山梨県立第一中学校校長で、札幌農学校第１期生でクラークの教えを受けた大島正健（1859－1938）の影響があった。その意味において、石橋湛山の場合にも、彼の経済的合理主義と宗教的信念は表裏一体の関係にあったのではないだろうか。

Ⅱ　矢内原と朝鮮

日本が日露戦争に勝利し、ポーツマス条約によってロシアに朝鮮に対する日本の勢力圏を認めさせたのが、1905年、そして日本が韓国を併合したのが1910年、その年は矢内原が一高に入学し、内村の聖書研究会に集い始めた年である。

その頃内村は、1904年の日露戦争を絶対的非戦論の立場から批判した後に1910年の日韓併合を批判していた。

「国を獲たりと喜ぶ民あり、国を失ひたりとて悲しむ民あり、然れども喜ぶ者は一時にして悲しむ者も亦一時なり、久しからずして二者、同じく主の前に立たん。而して其身に在りて為せし所に循りて鞫かれん、人、若し世界を獲るとも、其の霊魂を喪はば何の益あらんや、若し我領土膨張して全世界を含有するにも至も我が霊魂を失はば我は如何にせん嗚呼我は如何にせん。」（『内村鑑三全集』⑰、三三二）[8)]

当時組合派の海老名弾正や長老派の植村正久は、日韓併合を支持していたので、内村の批判は、キリスト教会でも少数派であった。

新堀邦司は、内村の「日韓併合」批判の背景には、朝鮮の独立運動の推進者で、1906年に来日して内村の聖書講義に熱心に出席していた金貞植（キム・ジョンシク）の存在があったと述べている。[9] この金貞植の影響によって、金教臣（キム・ギョシン、1901－1945）、宋斗用（ソン・ドゥヨン）、ハン・ソクホンが内村の聖書講義を受けるようになった。特に金教臣は、1921年から７年間、政池仁、石原永と共に「柏木青年会」に属しており、1924年からハン・ソクホン、宋斗用、鄭相勲（チョン・サンフン）、柳錫東（ユ・ソクドン）、楊仁性（ヤン・インソン）も内村の聖書講義に参加するようになった。金教臣は帰国後、同志六人で無教会雑誌『聖書朝鮮』を始めている。石原兵衛は、金教臣について、「氏は、民族的な苦悩を全身で受けとめ、苦難の中の同胞を最後まで愛し、これに真正の独立と救いを与えるため、まず自分の身体を神の祭壇に捧げて、神の聖書を同胞に与えようと決心したのである。」[10] と述べている。

金教臣は、また矢内原とも親しい関係を築いた。矢内原と朝鮮との出会いを、彼の日記に依拠して、追跡してみよう。[11]

矢内原の日記（M.44.1.26）には、「第一席、“The Tragedy of Corea”を読みて、植民政策の真相を思う。」とある。（㉘、一九）彼は、卒業したら朝鮮へ行き、朝鮮人のために働きたい、そして朝鮮人に福音を伝えたいという思いを抱いていた。彼が朝鮮で働くことを思い立ったのは、彼が一高時代の時、満州からの帰りに、朝鮮半島を横断して帰ってくる途中、「朝鮮鉄道の車窓より、禿山陋屋の間に出入する白衣長官の朝鮮人がまたわが眼前に彷彿としてきた」からであった。

彼は、大正五年に書いた「十字架を負うの決心」において、卒業後の自らの進路に関して、朝鮮に行き、朝鮮人のために十字架を負う決意を披露している。

「――それで、色々考えているうちに此の国を救わんといふ考の代りに斯民を愛せんという者が浮かんできた、それは朝鮮人であった。前には、日本帝国の植民地たる朝鮮半島の統治を思って居たのであったが、今度は人類同胞として国滅びて山河残れる朝鮮人の姿が思い浮かべられたのである。『われ朝鮮人の為にこの身を捧げんか』と思って来たのである。」（㉗、五七六）

しかし、彼は自分の心の中を見る時に、すべてを捨てて、朝鮮に行き、朝鮮人に尽くすことを拒む思いが深く巣くっていることを、知り驚くのである。

「此世の安き生活に執着する情は意外に強かった。僕は確かに驚いた、確かにしり込みをした。僕は十字架を負うの生活とは、如何なるものであるかが稍々明らかに教えられた様に思う、十字架の苦痛の幾分かが察せられた。」（㉗、五七八）

このように内面的な戦いを経験しつつも、矢内原は、「ああこの身、相応の財産と暖き家庭交友とに満足し楽にキリストを信じ行くべきであろうか、神様はこの身に要求せらるる処がないであろうか。主よ召し給へ、われ応じまつらん。」（㉗、五八一）と、朝鮮行への神の召しを求めているのである。

また彼は、1916年10月９日の「就職に就いて」の文章の中で次のように述べている。

「僕はどこかへ行って生活を立てていかねばならぬ。それは今までも度々書いた朝鮮である。元来僕は朝鮮人をかわいそうに思って居る。火として彼らに接して彼らの友になっていきたい。僕と朝鮮人とが友となることは、日本と朝鮮とが真の友人となる事の一部分である。政権と武力のみでは、到底朝鮮人を心服させることは出来ぬ、愛である。僕は、愛の心を抱いて朝鮮へ行きたい。朝鮮で僕のやりたいことは、朝鮮の青年と耶蘇に於いて交わることである。私立の小さな学校を起こして真の教育をやりたい。それから又真面目な雑誌を発行して朝鮮人のために口となろうと思ふ。旗は、キリスト教、目的は朝鮮人を愛し、日鮮の溝を埋めること、事業は学校と雑誌、之僕の志望である。」（㉗、六〇二～六〇五）

結局彼は、1917年３月に東京帝国大学を卒業した後に、家族に対する義務もあり、朝鮮行きを断念し、既に内村門下の黒崎幸吉（1886－1970）や江原萬里（1890－1933）が勤めていた新居浜にある住友別子工業所に就職した。しかし、彼の朝鮮に対する重荷は、消えることはなく、彼の朝鮮への思いはますます強められていった。

矢内原は、一旦別子銅山に勤めた後、新設された東京帝大の経済学部の助教授として、母校に呼び戻された。彼は、新渡戸稲造（1862－1933）が国際連盟事務局次長としてジュネーブに転身することとなったため、新渡戸が講じていた植民政策講座を継承し、学問的な植民地政策の視点からも朝鮮や中国に対する関心を深めていった。

矢内原は、1924年に第２回目の朝鮮旅行を試みている。この時は、正確には「朝鮮・満州調査旅行」であり、1924年９月30日から10月18日までが朝鮮、10月19日から10月29日までが満州であった。この旅行で、矢内原は単に植民地政策の学者として各地を視察するだけではなく、キリスト者として各地の聖書講演会で講演したりしている。

この朝鮮・満州旅行での成果は、東大での講義案「植民および植民政策」（１巻1926年）に取り入れられている。（なお矢内原は、植民地政策に関して、『植民及植民政策』（有斐閣、1926年）、『植民政策の新基調』（弘文堂、1927年）、『人口問題』（岩波書店、1928年）を刊行している。）また矢内原は、1926年６月に『改造』に、「朝鮮統治の方針」（①、七二五～七四四）を発表した。これは、1926年６月10日の京城において発生した反日運動のニュースを聞いて書かれたものである。

これ以外に矢内原が朝鮮について書いたものは、「或る朝鮮女学生との対話」（1937年、『矢内原忠雄全集』33巻所収）や、「朝鮮統治上の二、三の問題」（1938年、４巻所収）がある。

矢内原は、「植民および植民政策」の「教育・言語・宗教」の項目において、日本の皇民化政策、同化政策を批判して、「私は、朝鮮普通学校の授業を参観し朝鮮人教師が朝鮮人の児童に対し日本語を以て日本歴史を教授するを見、心中落涙を禁じ得なかった」（①、三二五）と述べている。彼は、日本語を強制することによって、日本に対する反抗心が強まることを恐れ、「本国語（日本語）の普及は、なるべく自然的発展によるべきである」（①、三二六）と主張する。また日本の神社参拝の強制に関しては、キリスト者として激しい憤りを感じ得なかった。

「然れども、政治的目的のために利用せられる宗教または教育は、往々『人民の阿片』

であり、それはあらゆる社会的害悪の中の最大害悪となる故に、植民者と現住者との宗教的接触に関しては、何等の政治的強制利用若しくは妨害あらざるべきである。朝鮮には、京城南山の山腹に官弊大社朝鮮神社の造営が着手せられ、台湾には、早くより、官弊大社台湾神社が造営された。『神社は我が民族の――民衆崇敬の中心を為』すものなので、『神社を其土に創建して民心の帰嚮する所を定めよう』と為されたのであるという。神社が植民地たる内地人に対して有する意義は、之を知るに難くない。私はただ朝鮮人若しくは台湾人の之に対する感慨を聞かんと欲する」(①、三二七)

矢内原は、神社を創建して、朝鮮人や台湾人の魂を支配しようとする無神経な試みに胸を痛まざるを得なかった。上記の文章で矢内原は、カール・マルクスが使用した「人民の阿片」という言葉を使用している。矢内原は、マルクス主義の宗教批判にも謙虚に耳を傾け、その批判の一定の正当性を承認した。それは、権力に迎合し、権力のはしためになっている宗教に対する批判であり、真の宗教改革のためには、権力に迎合した宗教を批判する必要があったからである。

次に、「朝鮮統治の方針」から矢内原の朝鮮に対する日本の植民地支配に対する批判を見ておくことにする。

彼は、この論稿において1919年３月１日に発生した日本からの独立を目指す三一独立運動（万歳事件）を想起して、総督府の武断政治を徹底的に批判している。

「私共は、当然大正八年時の李大王が薨せられたる当時を連想回顧する。そのとき多数の民衆が哀悼のため京城に集まり来たった。之を機会として、葬儀に定められし日の二日前、即ち三月一日を期してかの独立万歳事件が勃発したのであった。京城パゴダ公園における万歳唱和を第一声として、この運動は、忽ちにして全鮮に蔓延し、四月半頃までに騒擾箇所四百以上に達した。この運動は、非常に巧みに秘密裏に計画せられたものであったから、官憲の驚愕は一層甚だしく、各地に於いて流血の惨事を見たのは、返す返すも遺憾であった。この事件によりて、総督府の武断政治に対する不信任は最も明白に暴露せられた。寺内総督（在位1910－1916）は善意の武断政治家であった。長谷川総督（在位1916－1919）も同じ統治の方針であった。行政官吏も学校教員も制服帯剣であった。かくてサーベルの威力の下に朝鮮十三道は静謐であると思って居た。何ぞはからん、突如たる独立万歳の声！　もとより弱き朝鮮民衆、しかも元来が平和的方法によりて独立の、或はむしろ独立希望の、意志を表明したるに過ぎざるこの運動が、蜂起箇所が四百であろうが五百であろうが、順次わが軍隊と警察とによりて鎮圧せられてしまったに不思議はない。併し乍らこの事件は朝鮮民衆の勝利であった。総督政府の敗北であった。サーベル政治の破滅であった。」(①、七二五～七二六)

こう述べて、矢内原は、植民地政策の三つの形態、つまり「従属主義」、「同化主義」、そして「自主主義」を区別する。これは、矢内原の植民地政策論の根幹にある考えである。「従属主義」とは、植民地を、本国の利益に従属させることである。この結果は、原住民の抑圧であり、またその反動としての原住民の反抗である。「同化主義」は、「植民地を本国の一部として取扱い、本国の法制・風習・言語を普及せしめ、雑婚を奨励し、要す

るに植民地社会及び植民地人の本国化」（①、七三二）である。彼はこの「同化主義」を批判して、「何が故に同化政策は失敗したりといはるるか。原住民が悦服せざるが故である。何が故に悦服せざるか。彼等にとりて、同化の強制は、即ち圧迫に他ならないからである。他人をして強いて自己の如くならしめんとする。之れ他人の人格の侮辱である。その地位の侵害である。他人が自由に模倣するに任せよ。強制は圧迫である。且つ果たして他人をして自己に同化せしめ得るやが疑問である。外形生活上の同化を以て心的同化と同視するほど、愚かなことはない。」（①、七三二）と述べている。

彼が推奨する植民地政策は、「自主主義」であり、そのモデルは、大英帝国のドミニオンであった。それは、植民地社会の歴史的特殊性と集団的人格、自主的発展を推進することによって、帝国の結合を維持する道である。彼は言う。

「カナダ、豪州、ニュージーランド、南ア連邦その他の英帝国のドミニオンはその最も顕著なる典型である。即ち、これらのドミニオンは自己の議会及び之に対して責任をとる内閣を有し、英帝国とは帝国懐疑において結合せられて居るに過ぎない。彼等はほとんど独立国である。英本国に対しては、従属支配の関係を保たず、姉妹国として英帝国内にありて対等の地位を要求する。」（①、七三四）

もし日本が、朝鮮にたいして、朝鮮の議会や政府を認めるならば、当然朝鮮は日本に対して独立を要求するであろう。こうした異論に対して、矢内原は、「朝鮮は必ずしも分離独立しないであろう。反抗なき処に分離はない」（①、七四二）と述べている。しかし、矢内原は、朝鮮が日本から分離独立する道をも想定していた。このような矢内原の植民地政策は、軍部や政府から攻撃されること必定であった。それが後に1937年の「矢内原事件」に繋がっていくのである。しかし、矢内原は、憶することなく、次のように書いている。

「仮に自主朝鮮が全然日本より分離独立を欲するとしても、その事は、日本にとりて甚だしく悲しむべきことであるか。――仮に朝鮮が我国より分離したとて、当然に我国の敵国ではない。――かの李朝以来疲弊困憊せる朝鮮が、英国統治の下に於いて活力を得、独立国家として立つの実力を涵養することを得ば、之れわが植民政策の成功であり、日本国民の名誉ではないか。朝鮮統治の責任を完全に果たしたるものとして満足すべきではないか。」（①、七四二）

1926年時点で朝鮮の独立の可能性に言及し、それを支持する論説を展開したのは、矢内原だけではなかった。すでに述べたように吉野作造はすでに1916年の時点で朝鮮に対する同化政策を批判し、朝鮮の独立を主張していたのである。また石橋湛山も1921年に朝鮮・台湾・満州を捨てることを訴えた。しかしこうした少数派の声は帝国主義に向かう日本の多数の国民の声によって圧殺されることになる。

韓国の無教会主義者魯平久は、「矢内原先生と韓国」の中で、矢内原の発言は、当時の韓国の識者に対する大いなる激励であり希望であったと書き記している。[12)]

たしかに矢内原は、彼の著名な４部作の『帝国主義下の台湾』（岩波書店、1929年）、『満州問題』（岩波書店、1934年）、『南洋群島の研究』（岩波書店、1935年）、『帝国主義下の印度』（大同書院、1937年）のように、朝鮮の植民地政策に関するまとまった書物を公

刊していない。しかし、日本の朝鮮支配に対する矢内原の批判そして朝鮮の人々に対する矢内原の思い入れとコミットメントは並大抵のものではないことは、彼の一連の論稿から明らかである。

第三回目の朝鮮旅行は、1940年であった。この時には矢内原は1937年12月に『中央公論』に寄稿した「日本の理想」が問題となり、東京帝国大学を辞職していたので、植民地政策の調査のために出かけたのではなく、私的な立場での聖書講演が主であった。この講演を事実上計画し、指導したのは、金教臣であった。彼は、1940年３月に黒崎幸吉の聖書講演旅行も実現させている。３月は、金教臣が「創氏改名」を拒否し、皇民化政策に従わなかったので、彼が高等普通学校の教師を辞職した月である。矢内原は、1940年９月に京城での聖書講演会で５回にわたって「ロマ書」を講演した。この講演会は、朝鮮の総督府ににらまれていたので、弾圧を受ける可能性があり、「警察当局のきびしい監視下で行われた。」矢内原は、1940年６月18日の村山正雄（当時総督府財務局税務課長で、クリスチャンの旧友）の手紙に、「そもそもまた小生の聖書講演会そのものが、警察当局よりの弾圧の対象になる危険がありはしないか」と問い合わせている。彼は、決死の覚悟をして、朝鮮行きを決めたのである。彼は、今度朝鮮に聖書の講義をするために出掛けて行くと青年たちに言い遺し、『私の告別式にはロマ書八章三十一節以下を読んでくれ』と述べている。ロマ書の８章35節には、「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、餓えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか」とある。矢内原は、朝鮮民族に対するキリストの愛のゆえに、患難や迫害を覚悟して、朝鮮にでかけたのである。彼は、日本の皇民化政策によって苦しんでいる朝鮮民族と苦しみを共にしたいと願っていた。この講演にかけつけた朝鮮人も矢内原の日本の植民地政策に対する批判を十分理解し、またロマ書講義から朝鮮民族の慰めとヴィジョンを与えられた。新堀は、矢内原の朝鮮旅行の動機を以下のように書き記している。

「太平洋戦争が始まると、総督府の政策批判、軍部への［矢内原の］批判は容赦なかった。ことに『内朝一体』、『同化政策』を鋭く批判した。朝鮮語抹殺政策、創氏改名、神社参拝、朝鮮人キリスト者迫害に対して激しく憤り、『嘉信』を通して陰に陽に批判し続けた。軍部との死に物狂いの対決に身の危険すら覚えるほどだった。朝鮮の人々に対する愛が、死を賭しての朝鮮旅行となったのである。」[13)]

旅程は、８月22日から９月16日までで、矢内原は京城でのロマ書講演以外にも、朝鮮半島各地の教会で、聖書講演会を行った。ロマ書講演は、９月９日から13日まで、計５回行われている。申込者は140～50名で、北は鴨緑江から釜山まで、朝鮮人が２／３、内地人が１／３集まった。この講演に関しては、『矢内原忠雄－信仰・学問・生涯』（岩波書店、1958年）において、盧平久「矢内原先生と韓国」（312－116頁）、村田道雄「昭和十五年京城聖書講習会の思い出」（316－320頁）、籾山民子「朝鮮伝道について」（320－324頁）、本田昌男「先生の遺言」（324－327頁）、幼方直吉「京城の矢内原忠雄先生」（328－332頁）のコメントがある。蘆平久（ノ・ピョング、1913－2006）は韓国における第二世代の無教会信者である。なお第一世代のリーダーは、金教臣である。矢内原はロマ書講義に込めた並々ならぬ決意を以下の様に述べている。

「私は、1940年９月の初め、朝鮮に渡り、京城のキリスト教青年館で日本人及び朝鮮人の混合した会衆にむかって、五日間にわたり、ロマ書の講義をした。当時朝鮮はいわゆる皇民化運動の渦中にあり、キリスト教の伝道は、弾圧の下に置かれていた。特に私自身は、私の思想と言論の故に、総督府の歓迎せざる人物の一人であった。それ故に私の友人である一人の総督官吏は、私に対する警察の監視を避けさせるために、私の京城滞在中に私はその官舎に宿らせたのである。

かかる状況の下に私が朝鮮に渡ったことは、いくらか身辺の危険の予想せられなかったことではなく、私として決心を要した事柄であった。併しキリストの愛が強く私に迫って、警察政治の弾圧下にある朝鮮の人々に対し、個人の救いと民族の救についてキリストの福音を宣べ伝えることを圧倒的な使命と感じせしめた。それ故に私は『異邦人の使徒』と自らを称したパウロのロマ書を携えて、朝鮮海峡を渡ったのであり、五日間にわたってこれを講じた時、私の血管の中の一ドランマの血液もキリストの熱心に燃えざるものはなかったのである。本書に収めた『ロマ書講義』は、この京城講演の速記に基づいて執筆したものであり、かって私の個人雑誌である『嘉信』に連載させられたものである。」[14)]

この朝鮮におけるロマ書講義は、個人の救い、つまり信仰による義を明確に語ると同時に、民族の救いを強調し、神によって選ばれた朝鮮民族の救いについて語るのである。彼は、イスラエル民族の霊的復興を預言したロマ書11章の聖書講解の中で、民族の救いについて以下のように述べている。矢内原は、そこに朝鮮民族の未来を重ね合わせていたのである。

「民族が興隆しつつある時、その前途において希望を抱くは、やさしいことであります。民族が衰微しつつある時に、その将来に対して希望を有することは容易なことではない。その希望をパウロは、信仰に由って示したのです。本当に個人についても民族についても、信仰というものは絶望を知らないのです。それと同時に、いかに興隆しつつある民族でも信仰に由らざる時は、百年長久の計を立つるを得ないのです。興隆しつつある民族に対しても衰微しつつある民族に対しても、すべての民族に対して『神の仁慈とその厳粛とを見よ』と叫んだパウロに、万国の預言者として立てられたイザヤ、エレミヤの概がありました。」[15)]

またこの京城でのロマ書講演では、日本の国体概念、そして神社崇拝のような偶像崇拝に対する矢内原の批判も吐露されている。

「キリスト教国でない国々についてはどうかというと、各々の国が、それぞれ国体観念とか、国民精神だとかいう誇りをもって、我こそ正しい国だ、と思っている。かかる人々に対して、汝らが真の神を拝せずして造られた人若しくは鳥、獣の如きものを神として拝することによって、汝らの罪が露れている。そのことが根本となって、汝らのもろもろの不道徳が生じているんだ。こう指摘してご覧なさい。非常なる反感を買うにきまっている。」[16)]

矢内原は、一九四〇年の『嘉信』の三月号で、基督教会に対しても神社参拝が強要され、各家庭に神棚が置かれるという同化政策がとられていることを報告している。（㉕、

六四二）この時期には、神社参拝のみならず、創氏改名や日本語の強制、ハングルの禁止、朝鮮人の志願兵の徴募などが行われていた。こうした日本政府の朝鮮に対する植民地支配に対して、学生の頃朝鮮に行って、朝鮮の人々のために働きたいと思っていた矢内原は、胸を痛めざるをえなかったのである。

ちなみに『ロマ書講義』（『聖書講義Ⅲ』岩波書店）に収められている1937年の帝大の聖書講義において矢内原は、ロマ書13章１節の聖書釈義の中に、国家主義に対する辛辣な批判を吐露している。

「之によって我々は一方に於いて国家の腐敗の場合之を責める預言者であると共に、他方に於いて常に国家の権力に対する良心的服従者たり得るのです。否、国家権力が神より出たるものであることを知って之を重んずればこそ、それが濫用せられたる時預言者は黙さないのであります。」（⑧、二二八）

通常「上に立てられた権威に従え」というロマ書13章１節は、保守的な陣営からは権力に対する盲目的な服従として解釈される場合が常であるが、矢内原は逆に、神に逆らう国家に対して警告する使命を引き出しているのである。

ちなみに京城での聖書講演会を企画し、矢内原を招待した朝鮮の無教会クリスチャンの金教臣は、1942年３月に独立運動のゆえに逮捕され、1943年３月に死去した。[17] 彼だけでなく、『聖書朝鮮』に関連する400名が逮捕されたという。魯は、「矢内原先生と韓国」の中で、矢内原が朝鮮人に及ぼした影響について以下のように述べている。

「実は私は、第二次大戦終戦直後、こちらでラジオを通じ、韓国のガンジーといわれていた民族指導者曽晩植氏（1883－1950）が日本帝国主義からの民族解放の喜びを語りながら、しかも自分は只今日本の真の愛国者なる矢内原教授の心中を思い、限りなき悲しみを覚えるといっているのを聞き、遠く先生を思い深き感激に打たれたのでありました。一昨年ソウルでのささやかな先生の追悼会の席上でも、いわゆる太平洋戦争中中国アモイより日本軍により強制送還後投獄された李志成氏が、その後先生の『嘉信』誌より、日本人に対する切歯の恨みの中から、始めて日本人なる先生を深く尊敬するようになったといっていましたけれども、先生は、生涯よきサマリア人としてこちらの多くの人々の尊敬の的となっていました。」[18]

矢内原の朝鮮人への影響力は、彼が発行する『通信』、『嘉信』の購読者に朝鮮人が多かったことによる。なお曽晩植は、三・一独立運動に参加して逮捕され一年間服役したクリスチャンであり、ガンディの「非暴力・不服従」に共鳴し、「朝鮮のガンジー」と呼ばれ、独立運動を指導した人物である。

Ⅲ　矢内原と中国

矢内原が、中国を訪れたのは、５回、そのうちの４回、つまり1912年、1924年、1932年、1942年が満州である。

最初に、矢内原は、一高の興風会が企画主催した満州への旅行に1912年７月18日から８月２日まで、24名の一高生と共に参加した。当時満州には1905年のポーツマス条約により

南満州の鉄道の権益が日本に認められたこともあり、半官半民の南満州鉄道会社（満鉄）が設立され、長春から大連までの南満州鉄道の経営から、炭鉱、製鉄所、農地開拓など多角的な経営を行っていた。矢内原は、神戸港から門司港を経て玄界灘を通過し、大連に至り、そこから北上して旅順、南山、営口、遼陽、長春、哈爾浜（ハルビン）を経て、朝鮮半島を縦断して、帰国している。この旅行で矢内原が感じたことは、「感想の種々　一高健児の満州観（三）」が『矢内原忠雄全集』29巻に収載されている。また彼は「満州の旅」と題して、郷里の新聞『愛媛新報』に1913年８月９日から10月２日まで27回にわたって連載したが、これは、『矢内原忠雄全集』27巻に収録されている。この旅行で矢内原が見たものは、日本人による満州人に対する差別意識と日本人の島国根性であった。

「僕たちは支那人を見にきたのだけれども、却って好く日本人を見た。此の感想は旅行を終えて最後まで一貫した。――弱い、支那人に対しては『ちゃんころ、ちゃんころ』と頭から馬鹿にしている。此の根性が抜けぬ限り、如何に政府の殖民方針が立派であっても、十分の実が揚がらぬ訳である。」（㉗、九七）

また彼は、旅順で203高地を訪ねた時に日露の戦争を思い、「誠に戦争は惨劇である。義のための戦争、止むを得ざるにしても悲しい。況して名のための戦いは聞くだけでも唾棄すべきである。僕は深く世界が大なる平和の光につつまるる日の一日も早く来らんことを祈りつつ、再び馬車に乗った。」（㉗、九九）と書き記している。

ここに非戦論者矢内原の姿をみることができる。すでに矢内原の信仰の父、内村鑑三（1861－1930）は、日露戦争の勃発に対して非戦論を展開していた。内村は朝鮮の独立を支持し、そのために日清戦争を「義のための戦い」と正当化したが、戦後の国民や政府の国家主義的、膨張主義的な風潮に失望し、非戦論へと方向転換するようになった、彼は、日清戦争が終了した後の1885年７月に『国民之友』に「何ゆえに大文字は出でざるか」という論文で次のように戦後の日本の風潮を慨嘆した。

「オオ日本膨張論者よ、なんじは高尚天外にひびきわたるごとき街宣歌を求めるがごとし。余は今これをなんじに示さん。日本勝った。シナ負けた。えらいやつじゃ。賞金取った。負けなよ。えらいやつじゃ。」

また彼は、1895年５月22日のベル宛の手紙において、「義戦は強奪戦に近きものと化し、その『正義』を唱えた預言者は今や恥辱の中にあります」と自分の姿について語っている。内村は、日清戦争の経過や結果を通して、日本の戦争が義戦ではなく、強奪のための戦争であるという実態を鋭く認識するに至ったのである。そして彼は1896年12月の『福音新報』に「我むなしうて人充ち、我おとろへて国栄ゆ、貞を冥土の夫につくし、節を戦後の国に全うす」と書いたのである。1903年６月３日に『万朝報』誌に書いた「戦争廃止論」は、まさに彼の非戦論の火蓋を切ったものであった。

「世には、戦争の利益を説く者がある。然り、余も一時はかかる愚をとなへた者である。しかしながら今に至って、その愚の極まり師を表白する、戦争の利益はその害毒を償ふに足りない、戦争の利益は強盗の利益である――近くはその実例を二十七、八年の日清戦争において見ることができる、二億の富と一万の生命を消費して日本国がこの戦争より得しものは何であるか――その目的たりし朝鮮の独立は、これがために強め

られずして、かへって弱められ、支那分割の端緒は開かれ、日本国民の分担は非常に増加され、その道徳は非常に堕落し、東洋全体を危殆の地位まで持ち来ったではないか、この大害毒大損耗を目前に見ながらなおも開戦論を主張するが如きは、正気の沙汰ととても思われない」(『内村鑑三全集』①、二九六～二九七)

当然のことながら日露戦争前において開戦派が圧倒的多数であり、内村のような非戦派は極めて少数であった。日本基督教会の植村正久(1858－1925)も、植村は、日清戦争後に、進歩対野蛮という図式に従って、戦争を文明のための戦争として位置づけていたのである。

「西洋の列強が東洋に権力を伸張すると日本が蔓り出すとどちらが文明の扶植、人類の進歩に利益を与えますか。どちらが人に長として、小なるを導き、劣者を養いて、保母良友の義務を尽くすことができますか。――日本の軍艦巨砲は、アジアの進歩、人類の幸福に向かって何を意味するかという点が最も大切である。」[19)]

日露戦争前の内村の思いは、また日中戦争に対する矢内原の思いと同様であった。彼は内村の死後の1930年５月28日の内村鑑三記念講演会において、以下の様に述べている。当時キリスト教会にみられた日本は支那を罰する神の杖であるとする議論を強く批判するものである。

「答案に曰く、日本の国が支那を撃つのは聖書の示す教えである、神の命である、何となれば、支那は己の罪によって裁かれているのである、日本は之を審く神の杖であると。――明白に私は申しますけれども、かかる聖書の解釈が神の名によって立つところの教会、その信者によって唱へられて居るということは何事であるか！現実国家の命令には国民として服従致します。服従しなければなりません。併し、現実国家の言うところを悉く、道徳的にも信仰的に、而も聖書的に弁護するというならば、基督教の存在の価値はないのであります。」[20)]

第二回目の矢内原の満州訪問は、すでにのべた1924年の「朝鮮・満州訪問」であり、彼は、朝鮮の中国との国境地帯にある新義州から奉天に行き、撫順→奉天→大連を視察して帰国している。

第三回目に矢内原が満州を訪れたのは、満州事変後の1932年８月26日から９月21日までであり、この旅行で新京(長春)から哈爾濱に向かう途中の列車で匪賊に襲われて、九死に一生を得ている。彼は、前年起こった満州事変について、「私の歩んできた道」において、それが日本側の策謀であると感じていたことを戦後次のように述べている。ある意味においてそれを確かめるために、彼は満州に行ったといっても過言ではない。

「満州事変が起こった時に、私はおかしいと思ったのです。過去の日本の満州経営の歴史を考え、台湾とか朝鮮とか、また外国の植民地でも同じことですけれども、それらの歴史を考えてみると、当時の満州の情勢からみて、張学良の兵隊が満鉄の線路を爆破するというようなことはおかしいと、その真実性を疑った。それから、満州民族がいわゆる民族国家を作るということも、科学的に考えてもおかしい。それからいろいろなことを見たり、聞いたり、観察したりして、どうもおかしいと思ったのです。」(㉖、三九一)

彼は、この旅行で、長春（当時の新京）から哈爾浜に行く列車の中で匪賊に襲われ、かろうじて一命をとりとめている。そのことが彼の個人的な信仰雑誌『通信』を発行する機会となった。

矢内原は、こうした経験に基づき、満州事変、そして日中戦争に対して異議を唱えた。彼が満州事変について書いた論稿には、『帝国大学新聞』第448号（『矢内原忠雄全集』、５巻に収載）に書いた「満州国承認」（1932年11月）、『改造』に寄稿した「満州見聞録―昭和７年８～９月」（第14巻第11号所収）、『満州問題』（『矢内原忠雄全集』２巻所収）、「満州国・1933年」（1933年１月、『帝国大学新聞』、第460号、全集23巻所収）などがある。なお「匪賊にあった話」は、矢内原の『私の歩んできた道』（全集26巻）に収載されている。

まず最初に、『満州問題』から矢内原の満州問題に対する批判をみておくことにする。『満州問題』は、矢内原が1932年の満州旅行から帰国し、1932年の冬学期と1933年の夏学期の講義に幾つかの論稿を加えたものである。

彼は、この書物の目指すところのものを、「序言」において、「余の提供せんと欲するところはただ一の批判的精神あるのみ。蓋し批判の欠乏する所、盲目の危険は最も大であるがゆえに。」（②、四八七）と述べている。

日本は1928年に張作霖を爆死させ、1931年に満州事変を起こし、1932年には満州国を成立させた。その際満州人の民意はどこにあったのか。矢内原は、満州国の成立は、支那人の民族主義に合致したものではないとし、満州の二つの民意に就いて触れている。

「満州の所謂民意に二つあって、一は張氏政権と共に満州より駆逐せられ、他は満州国建設に表現せられた。前者は、新興支那国民主義的民意であり、後者は反支那国民主義的・『王道主義』的民意である。而して、この第二の民意を以て第一の民意に置き換えたるものが満州国であり、その置き換えの機会となったものが日本軍の活動であった。」（②、五四八）

次に、矢内原は、『帝国主義研究』（1938年、４巻所収）の「支那問題の所在」において、1936年に旧東北軍首領の張学良が西安で蒋介石を監禁した西安事件以降、国共合作によって南京政府を中心とした支那民族の国家統一運動と反日運動が強化された経緯について触れている。彼は、支那の封建主義的性格を強調する論者に対して、「支那社会の発展方向が、資本主義化にあり、近代的統一国家にある」（④、三三二）ことは疑いえない事実であるとし、国民党政府によって代表される支那の民族主義的性格を看過してはならないと主張する。彼は、国民党政府を近代日本の明治政府と比較し、「明治政府は藩閥政府であるとして民主的意味においては、攻撃せられる根拠があるとしても、そのゆえに明治政府による民族国家的統一を否定し得ざる如くである。」（④、三三二）と述べている。

更に彼は最近の支那における一連の事件を総括して、以下の様に述べている。

「半植民地たる状態を以上の如く経済的政治的近代化への発展過程において把握し、この見地において現代支那を見る時、それは明白に民族国家的統一への進歩を示しているのであって、民国革命［1911年の孫文の辛亥革命］はその第一頁であり、北伐成功［1927年］はその第二頁であり、共産軍の移遷はその第三頁であり、満州事変［1931年］はその第四頁であり、而して最近西安事件［1936年］も亦その第何頁かを占める。

満州を失うも失わざるも、北支工作を阻止し得るも得ざるも、すべての国内的対外的事変は悉く積極的また消極的に支那の民族国家的統一事業の進捗の拍車として働いたのである。」(④、三三六)

矢内原は、支那で民族的統一が進んでいる理由として、社会的に、漢民族が中心的役割を果たし、政治的には南京政府の財政的・軍事的実力に注目し、経済的には、上海を本拠地とする浙江財閥に見られる産業的・金融資本の展開に着目し、対外的には、民族国家建設のための帝国主義諸国による政治的支配の排撃の事業を強調し、思想的には、支那の民族意識、国家精神、愛国心の覚醒を挙げている。このような認識に立脚して、矢内原は日本の対支政策を次のように提唱している。

「支那問題の所在は以上の如くであり、その中心点は民族国家としての統一建設途上に邁進するものとしての支那を認識することにある。この認識に添いたる対支政策のみが科学的に正確であり、終局に基きて支那の民族国家的統一を是認し、これを援助する政策のみが、支那を助け、日本を助け、東洋の平和を助けるものであろう。我国の対支政策は、右の如き科学的認識に基礎する清浄の道に復帰しなければならない。」(④、三四〇)

この時点において、南京政府による民族国家的統一を矢内原が支持していることは、大変に勇気ある発言であり、まさに時流に流されずに、社会科学的認識に立脚した信念の発露であった。こうした彼の学問的認識を根底において支えていたのが、個人的・集合的人格の独立性を重んじるキリスト信仰であった。

ところで、1937年７月盧溝橋事件をきっかけとして日中戦争が発生し、1937年12月に日本軍の南京攻略の際に南京事件が生じた。矢内原は、1939年11月26日において、駿河台女子基督教青年会で行ったイザヤ書に関する講演で、南京事件に触れて、以下の様に述べている。そこには軍部に対する当時の基督教会の迎合的姿勢に対する矢内原の批判が展開されている。

「去る11月３日東京青山にて、基督教徒大会なるものが開かれ、午前には基督教講演があり、午後には文部省宗務局長の講演を聴き、且つ某陸軍大将［松井石根］の挨拶があった。その陸軍大将の挨拶に先立ち司会者は大将閣下の臨席を非常に光栄とし、一同起立して大将を壇上にお迎えする事を要求した。それで一同起立したということである。――その陸軍大将は、南京事件当時の最高指揮官であった。南京陥落の時に、アメリカのミッションで建てられている基督教の女学校に対して、一つの大きな間違が冒された。そのことが報道されて、外国殊にアメリカの排日的感情に油がそそがれたのである。若しそういう事実を基督教教徒大会の主催者が知らなかったとするならば、之は甚だしき怠慢である。知っていたとするならば、何という高慢無恥であるか、その事件の責任者たる者は、手をついて基督教会の前に謝らなければならない。基督教徒大会は、日本の基督教徒の名に於いて謝罪を要求すべきではないだろうか。それを全会衆が起立して迎えるとは、之ほど逆さまの事がありますか。」[21)]

こう述べて、矢内原は、「こんなに腐っている。いくら憤慨しても憤慨しきれません。偶像であります。偶像崇拝であります」と慨嘆し、現在の国家と教会の状況を「バビロ

ン、大きなバビロン、政治的にもバビロンだし、霊的にはもっと大きなバビロンです。」と教会と国の滅亡を警告している。矢内原にとって権力と妥協し、教会に託された神のメッセージを喪失した日本の教会の宗教改革こそ何ものにまさって優先すべき事柄であった。

最後に矢内原は、日本が敗戦を喫したミッドウエー海戦の後、1942年７月の４～８、11日に「満州・北支旅行」を行っている。この旅行記録は、『全集』（㉓、三〇七～三三〇）に収載されている。

松谷曄介は、「矢内原忠雄と中国―国家の理想から王明道訪問へ」において、矢内原が当時の中国のキリスト教指導者で、日本が宗教政策の一環として結成した「華北中華基督教団体」に反対し、独立教会を守ろうとした王明道（1900－1991、ワン・ミンタオ）を訪問したことを伝えている。この点に関して松谷は、「矢内原と王明道は、政治的宗教政策に対する拒絶、神の正義・真理を常に優先させる信仰的姿勢、無教会的独立集会、独自の雑誌発行などの点で多くの共通性を持っていた」[22] と述べている。日本の教会の堕落をつぶさに目撃した矢内原は、王明道の信仰の姿勢に、中国伝道に対する一条の光を認めたのではないだろうか。ちなみに王明道は、共産党によって設立された「三自愛国運動委員会」への参加を拒否し、1956年から1978年まで通算23年間にわたって獄中生活を送っている。[23]

ところで、矢内原は、矢内原事件の後に東大を辞職した後、1938年にクリスティー著『奉天三十年』（上）（下）（岩波新書）（原題　Thirty Years in Moukden. 1883-1913, 1914）を翻訳して、刊行した。著者デュガルド・クリスティーは、1883年に基督教の宣教師かつ医師としてスコットランドから1883年に来て、1922年に帰国するまで約40年間、満州人のために生涯をささげた人物である。矢内原はこの医療宣教師の愛と犠牲が、日本の満州に対する態度にとって不可欠であると考えた。植民地政策の学者として、満州支配の問題点を鋭く指摘する矢内原の背後に基督の愛と犠牲によって満州人に仕えることを強く教えられていた矢内原がいた。彼は言う。

「満州及び支那問題の解決、即ち東洋平和の永久的基礎は、満州人及び支那人の人心を得ることでなければならない。而してそれは国家としての愛撫政策を以っては得られない。人間としての無私純愛の生活態度を以て、彼等のために深く、且つ長く奉仕する個人こそ、東洋平和の人柱であり、その如き人間をば満州及び支那に供給することこそ、日本国民の名誉でなければならない。1883年（明治十六年）スコットランドの医科大学卒業生クリスティーの抱いた如き志が、我が日本の青年学生からも起これ！その願を以て、私はこの拙訳を彼等に送る。」[24]

著名な労働経済学者で、東京女子大学の学長を務めた隅谷三喜男（1916－2003）は、この本に関して、「三十八年末に『岩波新書』の最初を飾った先生の訳業『奉天三十年』は、先生の健在を示すとともに、大きな感激と暗い時代の光明とを与えてくれた。大学を出てから満州にいこうと決心するようになった遠因は、この本にあるといってよいであろう。」（「顔をかたくエルサレムに向けて－遠くから見た矢内原先生」）と書き記している。[25] 彼は矢内原の思いを真剣に受け止めて、行動した一人である。

Ⅳ　矢内原の西欧帝国主義批判

矢内原の日本帝国主義批判は、植民地政策批判という形で特に満州事変以降折に触れて行われたが、彼は、英米の帝国主義にも批判的であった。

矢内原は、1939年９月24日、駿河台において「世界の大勢を論ず、附　藤井武の伝道について」において、「今日、世界は挙げて戦争の不安な、非常に不気味な状況の下におかれている」（『聖書講義』Ⅶ－524）と述べ、新興国による領土再分割の要求が既得権益を持つ英、米、仏の支配体制を脅かしていることに戦争の原因があることを指摘している。矢内原がこの講演を行う前の1939年９月１日には、ナチス・ドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まっていた。

矢内原は、第一次大戦後に創設されたヴェルサイユ体制と国際連盟の政治的性格をリアリスチックに分析している。

「今日に於いてベルサイユ平和条約が如何に不合理なものであるかは、ヒットラーの言を俟たずして周知の事実である。ヒットラーはナチスの政策を弁護して、ベルサイユ条約の誤謬に修正ありと言って居るが、その限りにおいて、彼の言う所は正しい。ベルサイユの平和条約は、どこが誤謬であるかといえば、新興勢力たるドイツ、イタリー、日本の勃興が抑えられている。特にドイツをば軍事的及び経済的に手も足も出ない様な状態に束縛してしまう、永久に手も足ももいだ蟹の様にして這わせておこう、というのがベルサイユ条約の精神である。――生活力のあるドイツ民族の国家に対し、半身不随の永久的状態を押し付けようとする如きは、学問的認識において誤謬であり、道徳的判断において罪悪である。」（Ⅶ－526）

同様に国際連盟も戦勝国の利益を優先したシステムであり、「公正な領土の再分配を斡旋し、世界平和に合理的基礎を与える」ことに失敗したので、国際連盟の崩壊は当然の結果であった。

とはいえ、矢内原は、ヒトラーのチェコやポーランドへの侵略を肯定することはなかった。彼はヒトラー・ドイツの侵略政策や反ユダヤ主義を痛烈に批判する。

「ベルサイユ条約は誤謬であったけれども、それを修正するためにヒトラーのとった手段も亦誤謬である。誤謬をもって誤謬を修正することは出来ない。国内にあっては、無垢のユダヤ人を迫害し、国外に対しては近隣諸国を侵略する。――即ち国々の罪と罪が鉢合をしているのが、現下の世界不安の真相である。」（Ⅶ－527）

そして矢内原は、「今日の世界の混乱は、神を離れて己の力によって国を立て、国を拡げてゆこうとする人間的努力から起こったものである」（Ⅶ－528）と結論づけている。

矢内原は、ユダヤ人に対するナチスの迫害に注目した。それは、人権侵害の観点からのみならず、選民ユダヤ人に対する神の摂理の観点からである。彼の関心は、ロマ書９－11章におけるユダヤ人の将来に関する聖書の解釈に基づいていた。彼は言う。

「今日における世界的大問題の一つは、ナチス・ドイツにおけるユダヤ人の迫害である。之は、聖書に示されたる神の経倫の法則に照らして、基督者に取り、重大なる関心をそそる問題である。」（Ⅶ－576）

矢内原は、B.C.6世紀にバビロンに捕囚されたユダヤ人を解放するためにペルシャのクロス王が現れたように、ナチス・ドイツからユダヤ人を解放するものが現れ、ナチス・ドイツは神により審判を受けるだろうと予測した。神はユダヤ人を捨ててはおられないからである。

「然らば現代において、ナチスの捕囚よりユダヤ人を解放する器として、神は共産主義者であるスターリンをも起用し得給うのであり、或いは欲するままに用い得給うのである。思うに、内にありてはユダヤ人を迫害し、外にありては隣国を侵略し、自由と学問の敵たるナチスは神の審判を免れ得ないであろう。」（Ⅳ－576）

このように、矢内原は英米を含めた西洋の帝国主義に対して批判的であったものの、それによってナチス・ドイツの侵略や反ユダヤ主義を相対化したり、免罪することはなかった。それと同様に日本の帝国主義的膨張に関しても、極東の「勢力均衡」を持ち出して正当化することはなかったのである。それは、彼が超越的な神の正義という視点を絶えず持ち続け、自国や自民族の国益や都合を「正義」という名をもって偽装して主張することを断じて否定したからに他ならない。

注

1）『吉野作造政治史講義―矢内原忠雄・赤松克麿・岡義武ノート』（岩波書店、2016年）　矢内原のノートは、1913年における吉野の民主主義や社会主義に関する講義を取り扱っている。
2）『吉野作造集』（近代日本思想体系17、筑摩書房、1976年）、165頁。
3）岡義武編『吉野作造評論集』（岩波文庫、2016年）、269頁。
4）同、272頁。なお岡義武は、吉野作造の民本主義と国際主義は、キリスト教の信仰に深く結びついたものであったと述べている。岡義武編『吉野作造評論集』、316－17頁。また宮田光雄は、「こうした吉野の政治的信条の根底には、カント的な意味での人格主義、ひいては、キリスト教信仰があったことは明らかである。それを彼は、外の政治の世界に向かっては、いわば《宗教家ならざる宗教家》（牧野英一）として、人間の権利と尊厳に根ざすデモクラシー理論の形で展開したのであろう」と述べている。（宮田光雄『国家と宗教』、岩波書店、2010、345頁）ただ宮田は、朝鮮に対する態度は、吉野作造と彼が信仰的に師事し、大きな影響を受けた海老名弾正と異なっていたと付け加えている。
5）松尾尊編『石橋湛山評論集』（岩波文庫、2014年）、90頁。
6）同、113頁。
7）同、114頁。
8）この文章は、最初内村鑑三『聖書の研究』（123号、明治四十三年九月十日）に掲載された。また内村は『聖書の研究』115号、明治42年12月10日において、「朝鮮国と日本国」において、日本の膨張主義を批判して、以下のように述べている。
　「日本国は、過去十数年間に於いて、地上に多くの物を獲た、台湾を得た、樺太を得た、満州を獲た、また実際的に挑戦をも獲た、然し、物に於いて獲し日本国は霊に於て多くを失った。其の士気は日々に衰えつつある、其道徳は、日々に堕ちつつある。其社会は日々に壊れつつある。」（『内村鑑三全集』⑰、六八、六九）
9）新堀邦司『金教臣の信仰と抵抗』（新教出版社、７頁）
10）同書、24頁。
11）幼方直吉「矢内原忠雄と朝鮮」（思想、No.495, 1965.09）を参照。
12）南原繁他編『矢内原忠雄　信仰・学問・生涯』（岩波書店、1968年）、313－314頁。
13）新堀邦司、前掲書　90－91頁。
14）矢内原忠雄『聖書講義Ⅲロマ書』（岩波書店、1978年）、４頁。

15）同書、206－207頁。
16）同書、54頁。
17）幼方直吉「矢内原忠雄と朝鮮」（思想、No.495、1965.09）、52頁。
18）南原繁他編『矢内原忠雄　信仰・学問・生涯』（岩波書店、1968年）、312－313頁。
19）『植村正久とその時代』（四巻、748－785頁）
20）同書
21）矢内原忠雄『聖書講義Ⅶ』（岩波書店、1978年）、577頁。
22）松谷曄介「矢内原と中国―「国家の理想」から王明道訪問へ」（『システム研究』、第25号、2012年９月）、97頁。松谷は、矢内原が王明道同様に、日本における教会合同問題に対して否定的であったことを指摘している。同、112－113頁。
23）王明道の戦後の闘いについては、王明道『生命の冠―中国・キリスト教会指導者の闘い』（暁書房、1987年）を参照。同じく三自愛国教会に加わることを拒否したウオッチマン・ニーも1952年に逮捕され、1972年に獄死した。
24）クリスティー『奉天三十年』（上）（岩波新書、2008年）、４頁。
25）南原繁他編『矢内原忠雄　信仰・学問・生涯』、269頁。

参考文献

『矢内原忠雄全集』全二九巻（岩波書店、1963－1964年）
『内村鑑三全集11、18』（岩波書店、1981、1982年）
岡義武編『吉野作造評論集』（岩波文庫、2016年）
クリスティー『奉天三十年』（上）（下）（岩波新書、2008年）
赤江達也『紙上の教会と日本近代―無教会キリスト教の歴史社会学』（岩波書店、2013年）
赤江達也『矢内原忠雄―戦争と知識人の使命』（岩波新書、2017年）
柳父圀近『日本的プロテスタンティズムの政治思想』（新教出版社、2016年）
松尾尊編『石橋湛山評論集』（岩波文庫、2014年）